

保久良神社（市民の森）・梅林

阪急岡本駅の北、金鳥山の南中腹に保久良神社があります。ここには樹齢100年以上といわれているヤマモモ林があり、クログナモチ、クスノキ、スギなどとともに自然性の高い森林として市民の森に指定されています。ヤマモモの雌木には6月頃に食用になる実があります。



昭和50年には、神社境内の西側に保久良梅林が開かれ、ヤマモモ林とともに市民の憩いの場となっています。



岡本周辺の市民の木

神戸市では、長い歴史を生きつづけ、当時の名残をとどめる古木や大木などの名木を市民の木、森林を市民の森として市民のご協力のもとに指定しています。

雀の松原のクロマツ

魚崎一帯の松原は、古来、雀の松原と呼ばれ、山陽道（西園街道）沿いの景勝地でした。このクロマツは当時の名残をとどめる1本で、横には雀の松原の由来を取った2つの歌碑が立っています。



住吉川沿いのクロマツ

住吉川沿いはクロマツ並木になっていますが、なかでも住吉川にかかる新反高橋を東に渡った歩道上にあるこのクロマツの大木は雀の松原の名残をとどめています。



鶯の森のケヤキ

鶯宮八幡神社には昔はうさそうと茂った森があり、鳥が巣をつくり、鶯の森と呼ばれていました。明治の初期から森は切り開かれていきましたが、このケヤキだけは現在も残り、昔日の名残をとどめています。



本住吉神社のムクノキ

このムクノキは旧西園街面に面した本住吉神社の境内にあります。大正15年に神社が塙を建てる際、この木を残すために木を囲むように建てられたといわれています。



東灘/岡本

花を巡る

文学散歩

作家・水上勉の『櫻守』を歩く

『櫻守』あらすじ

物語は、主人公の庭師北弥吉の幼い日、山桜が満開である在所の京都府北桑田郡鶴ヶ岡村の青山を木樵の祖父と登って行くところから始まる。その日、満開の山桜の樹の下で久しぶりについてきた母と祖父の情事の余韻を見る。この情景は弥吉の心に深く焼き付けられる。弥吉は14才になると、京都の植木屋「小野基」に奉公する。そこで先輩であり、生涯の友となる、石に詳しい庭師橋喜七に出会った。その紹介で、大阪中之島の資産家の次男で東大を出て、生涯無位無冠で桜一筋に情熱を傾ける桜研究者竹部庸太郎の雇い人となり、武田尾の桜演習林や向日町の桜苗圃などで特に接木や接穂作りなど山桜の種の保全と育成、普及の研究の働きをすることになった。そこでの生活の中、弥吉は武田尾温泉で園と出会い、周囲のすずめもあって結婚する。竹部は桜に明け暮れていた。竹部は父から大学にゆくのはいいが、月給取りにはなってくれるな。一略一お前は、どんなことでも、白と信ずれば白と云い切る男になれ。と教えられた。園は、なぜ竹部は桜に夢中になったのだろう、と訊く。弥吉は密かに桜の木の下の祖父と母を思いだし、早く母を亡くした竹部にも、一生忘れられない同じ風景があるのではないかと思った。そして弥吉は心の中で竹部も桜のために生まれてきた人間だと秘かに思う。戦争のために徴兵された弥吉だったが、終戦後、弥吉と喜七は小野基に復帰し待望の庭造り大喜びで始める。初仕事は、東京から来た若い造園家の設計による料亭の庭造りだった。彼の設計意図は花木のにぎやかさと石組みの豪華さだけを強調した外園好み庭造りだった。特に桜の植え方は、里桜の普及象を築山の常緑樹のうしろに隠し植えよ、と若い設計者は言う。弥吉の思いとは違った。<桜はうしろに常緑樹をめぐらせて屏風にしなれば映えない。これは常識だった。空に向けて咲くのでは空の色に吸われるのである。>竹部はいつも言っていた。昭和36年4月、弥吉は新聞紙上で名神高速道路建設により、桜を守るための砦としての向日町苗圃が数百本の桜とともに消えゆくことを知った。弥吉は竹部に会いに行った。<岡本の駅で飯急を降り、弥吉は、なつかしい川沿いの道を歩いた。><竹部は柔和な老翁の貌をほほえまして、そこにのっそりと立っていた。>そして竹部は向日町の桜苗圃の件ではごね得と言われ、心を痛めている経緯を話し、20年以上土作りをしてきた桜苗圃のなくなることを憂えた。そのときすでに竹部は庄川の御母衣ダム建設に伴う樹齢400年以上のエドヒガン2本の移植を引き受けていた。<略、四百年も生きた老木、しかも桜の移植など聞いたことがない。><略>竹部は今日七十五歳である。桜一途に生きてきて、すべての財産を投じて、桜の品種改良と日本古来の山桜の養生に身をけける思いで来た。その今までの努力はわかるけれども、老境に入って、前代未聞の老桜の移植をひきうけている。一略一もし不成功に終わったら、竹部は今日までの桜にそそいだ人生を棒に振りはないか。一略一弥吉はそう思った。<松や桜は移植に弱い。しかし、竹部は辛苦の末、この老桜2本の移植に成功した。><湖水は両側の山影をうかべ、ちりめん肌をたてて鏡のように照っていた。二本の桜は、新しい枝を張って芽ぶいた若葉のあいまからうす桃色の美しい花をのこさせて、春風にゆれていた。>

東灘/岡本

花を巡る

文学散歩

作家・水上勉の『櫻守』を歩く

(モデルコース)

阪急岡本駅一岡本(梅林)公園 一岡本南(桜守)公園一本山街園(バラ園)一『細雪』の碑一JR住吉駅一阿弥陀寺(谷崎潤一郎の歌碑)一本住吉神社のムクノキ一住吉川沿いのクロマツ一倚松庵一雀の松原のクロマツ一阪神魚崎駅

岡本について

現在の東灘区岡本6、7丁目にはかつて梅林、梅ヶ谷などという古い地名がありました。ここは梅が山麓一帯に咲き誇り、「梅は岡本、桜は吉野、みかん紀の国、栗丹波」と唄われた岡本梅林のあとです。最盛期、江戸時代の梅見のにぎわいは、『撰津名所図会』にも描かれ、人々にも知られるようになり多くの文人が訪れました。現在では昔日の面影はありませんが、岡本梅林をしる、保久良山の保久良梅林や岡本6丁目に岡本(梅林)公園が開設されています。

また、『細雪』で知られる作家・谷崎潤一郎は芦屋市、神戸市など阪神間で数回転居を繰り返して、神戸市では岡本梅林近くや住吉(倚松庵)、魚崎などに住み、多くの作品を執筆しています。

このガイドマップを作成するにあたっての参考文献
水上勉『櫻守』(新潮文庫) | 田辺漁人著『東灘文学散歩』(東灘区役所発行)
谷崎潤一郎『細雪』(新潮文庫) | 野元正木ホームページ『花四色彩』
笹野新太郎『櫻男行状』(双葉社)

発行 神戸市建設局公園施設部計画課
お問い合わせ 078(322)5422
神戸市広報印刷物登録平成16年度第316号(広報印刷規格D類)
この印刷物は再生紙を利用しています

小説『櫻守(水上勉著)』について

水上勉の小説『櫻守』のモデル、笹野新太郎が晩年を過ごした神戸市東灘区岡本にあった笹野邸は現在、南隣地を含めて神戸市の都市公園(岡本南公園)になっています。この『櫻守』で作者は、彼の郷土に近い丹波の風土に根源を置きながら、桜にすべての私財と情熱をささげた実在の人物笹野新太郎をモデルにその業績を、同じく桜に情熱を注ぐ一介の庭師北弥吉の眼を通して描いています。この『櫻守』の究極のテーマは桜に表象される失われゆく日本の美に対する限りない哀惜ですが、失われゆく日本の風土への警鐘のようにも感じられます。

『櫻守』あらすじ

物語は、主人公の庭師北弥吉の幼い日、山桜が満開である在所の京都府北桑田郡鶴ヶ岡村の青山を木樵の祖父と登って行くところから始まる。その日、満開の山桜の樹の下で久しぶりについてきた母と祖父の情事の余韻を見る。この情景は弥吉の心に深く焼き付けられる。弥吉は14才になると、京都の植木屋「小野基」に奉公する。そこで先輩であり、生涯の友となる、石に詳しい庭師橋喜七に出会った。その紹介で、大阪中之島の資産家の次男で東大を出て、生涯無位無冠で桜一筋に情熱を傾ける桜研究者竹部庸太郎の雇い人となり、武田尾の桜演習林や向日町の桜苗圃などで特に接木や接穂作りなど山桜の種の保全と育成、普及の研究の働きをすることになった。そこでの生活の中、弥吉は武田尾温泉で園と出会い、周囲のすずめもあって結婚する。竹部は桜に明け暮れていた。竹部は父から大学にゆくのはいいが、月給取りにはなってくれるな。一略一お前は、どんなことでも、白と信ずれば白と云い切る男になれ。と教えられた。園は、なぜ竹部は桜に夢中になったのだろう、と訊く。弥吉は密かに桜の木の下の祖父と母を思いだし、早く母を亡くした竹部にも、一生忘れられない同じ風景があるのではないかと思った。そして弥吉は心の中で竹部も桜のために生まれてきた人間だと秘かに思う。戦争のために徴兵された弥吉だったが、終戦後、弥吉と喜七は小野基に復帰し待望の庭造り大喜びで始める。初仕事は、東京から来た若い造園家の設計による料亭の庭造りだった。彼の設計意図は花木のにぎやかさと石組みの豪華さだけを強調した外園好み庭造りだった。特に桜の植え方は、里桜の普及象を築山の常緑樹のうしろに隠し植えよ、と若い設計者は言う。弥吉の思いとは違った。<桜はうしろに常緑樹をめぐらせて屏風にしなれば映えない。これは常識だった。空に向けて咲くのでは空の色に吸われるのである。>竹部はいつも言っていた。昭和36年4月、弥吉は新聞紙上で名神高速道路建設により、桜を守るための砦としての向日町苗圃が数百本の桜とともに消えゆくことを知った。弥吉は竹部に会いに行った。<岡本の駅で飯急を降り、弥吉は、なつかしい川沿いの道を歩いた。><竹部は柔和な老翁の貌をほほえまして、そこにのっそりと立っていた。>そして竹部は向日町の桜苗圃の件ではごね得と言われ、心を痛めている経緯を話し、20年以上土作りをしてきた桜苗圃のなくなることを憂えた。そのときすでに竹部は庄川の御母衣ダム建設に伴う樹齢400年以上のエドヒガン2本の移植を引き受けていた。<略、四百年も生きた老木、しかも桜の移植など聞いたことがない。><略>竹部は今日七十五歳である。桜一途に生きてきて、すべての財産を投じて、桜の品種改良と日本古来の山桜の養生に身をけける思いで来た。その今までの努力はわかるけれども、老境に入って、前代未聞の老桜の移植をひきうけている。一略一もし不成功に終わったら、竹部は今日までの桜にそそいだ人生を棒に振りはないか。一略一弥吉はそう思った。<松や桜は移植に弱い。しかし、竹部は辛苦の末、この老桜2本の移植に成功した。><湖水は両側の山影をうかべ、ちりめん肌をたてて鏡のように照っていた。二本の桜は、新しい枝を張って芽ぶいた若葉のあいまからうす桃色の美しい花をのこさせて、春風にゆれていた。>

~岡本~ 花を巡る文学散歩 周辺施設

倚松庵



東灘から芦屋にかけて数ある谷崎潤一郎の旧宅の一つで、昭和11年11月から昭和18年11月まで住んでいました。もとの「倚松庵」は現在より少し南にありましたが、住吉川右岸線の道路築造工事のため、この場所に移築され、一般公開されています。谷崎潤一郎の小説「細雪」はここでの生活から生みだされたといわれています。

入館料/無料
開館時間/10:00~16:00
開館日/土日曜・日曜(年末年始除く)

阿弥陀寺



谷崎潤一郎の生誕百年にあたる昭和60年に2つの文学碑が建てられました。1つは住吉本町の阿弥陀寺の門前に歌碑が建てられました。この歌は昭和19年4月15日に熱海に向かって疎開する際に住吉駅で詠んだものです。もう1つは『細雪』にも描かれた本山第二小学校の校庭に『細雪』の一節がざぎざまれています。

谷崎潤一郎の歌碑
「故郷の花に心を残しつつ
立つやかすみの風流住吉」

本山街園



山手幹線と魚崎幹線の交差点に本山街園があります。昭和38年、山手幹線の建設に合わせてバラを植えたのが始まりで、昭和54年までは「神戸バラ協会」が管理していました。その後神戸市に委ねられ、昭和63年に改修された現在の姿になりました。29種類のバラはそれぞれの特性を生かして植えられ、道行く人の目を楽しませてくれます。バラは春と秋に最盛期を迎え、見ごろは5~6月と10~11月です。



弓弦羽神社



飯急御影駅から南東に徒歩約5分のところにある、明治維新以前からの御影町の氏神様です。境内には神戸市指定天然記念物の指定を受けた樹齢約350年のムクノキや3月下旬頃から地面に流れるようにピンク色の花を咲かせるイトザクラがあります。また、エノキ、クスノキなどが生い茂り、「市民の森」に指定されています。

清流の道



住吉川に沿って、上流の白鶴美術館付近から、菊正宗酒造記念館前の島崎橋までの約2.7kmの区間は遊歩道「清流の道」として整備されており、散歩やジョギングを楽しむ人や夏には子供達が川で遊ぶ姿も見られます。

谷崎潤一郎の『細雪』には阪神大水害(S13年)の住吉川の氾濫の様子が描かれています。

<住吉川の氾濫の状況がやや伝はって来て、園田の田中から以西は全部大河のやうになって濁流が満溢していること、従って野暮、横屋、青木等が最も悲惨であるらしいこと、園田以南は甲南市場も、ゴルフ場もなくなつて、直ちに海につながつてゐること・・・>

<内は『細雪』(新潮文庫)の原文より引用

<内『櫻守』(新潮文庫収録)の原文より

水上勉『櫻守』に関連する施設

岡本南(桜守)公園

岡本南公園は、小説『櫻守』のモデルで90余年の生涯をサククラにかけた故・笹部新太郎氏の邸宅跡を公園としたものです。1960年(S35)笹部氏は大阪から神戸市東灘区岡本の当地に越しにきました。笹部氏の死後、この屋敷跡は神戸市に買い上げられ、1981年(S56)に整備、開園されました。園内には、小説『櫻守』にも出てくる御母衣ダムで移植したエドヒガン(荘川桜)の分身など、10種の珍しいサククラが個性を競っています。



なお、笹部氏が自ら育てた実生原木の笹部桜は震災後枯死しましたが、念のため離宮公園で挿し木されていた後継樹が現地に植えられ、春の満開には私たちを楽しませてくれています。



岡本南公園には笹部氏の業績を称える碑があります。『笹部新太郎氏の九十余年にわたる生涯を通じて最大の業績は岐阜県の御母衣ダム建設により水没する運命にあった樹齢四百五十年の巨桜「荘川桜」の移植に成功したことであった。』

小説『櫻守』にも何度か竹部郎の記述があります。<竹部の家の前に立った時、しばらく門と内庭のあたりを眺めた。少しも変わっていない。・・・鉄扉をあけて弥吉は「涼の植木職の北ですわね」といった。・・・やがて竹部がこぼれと現れた。弥吉は、一瞬、声が出なかった。大柄で肩の張ったあたりはむしろ変りないが、頭髪は白くはげがっている。顔もずいぶん老けていた。竹部はいま、柔和な老翁の顔をほほえまして、そこにのっそりと立っていた。>

岡本南公園に植わっているサククラ

ササバザクラ(笹部桜)

小説『櫻守』に登場する櫻研究家の竹部のモデルとなった笹部氏が旧宅(現岡本南公園)で育成していたサククラが園芸品種の新種だと判り、この品種は「ササバザクラ」と命名されました。

笹部氏は生前「これは日本一のサククラである」と言って特に大事に育てられ、亡くなられる時にはこのサククラを「笹部桜」と名づけたといわれたサククラです。

なおササバザクラの原木は平成10年に惜しくも枯死を遂げましたが、原木から接ぎ木繁殖や実生繁殖した後継樹が、園内各所で春には花を咲かせています。



エドヒガン(荘川桜)

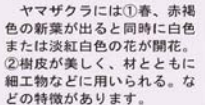
笹部氏は岐阜県の御母衣ダム建設によって水没する運命にあった樹齢450余年の2本のエドヒガン「荘川桜」の移植を移植不可能と言われながらも昭和35年に73歳の年齢で成功させています。



岡本南公園にあるこの桜は荘川桜の実生苗の苗木に、照蓮寺(移植された2本の荘川桜の1本)の枝を接ぎ木した桜です。小説『櫻守』でも、竹部が庄川の御母衣ダム建設に伴う樹齢400年以上のエドヒガン2本の移植を成功させた記述があります。

ヤマザクラ(権現平の桜)

このサククラは笹部氏が自著『櫻男行状』のなかで「ことごとく優れた山桜であり」「その花の佳き私の知る限り群を抜いていた」と称していた和歌山白浜町にある権現平のサククラの実生苗から育てたものです。



この公園には、このほかにもオカモトザクラ(笹部氏が岡本の邸内に植えていた、オオヤマザクラとオオシマザクラの混血種。この植栽地に因んで命名されたサククラで白い大きな花びらが特徴)などの珍しいサククラが植栽されています。

岡本周辺案内図



モデルコース

— <のんびりコース(3~4時間)> —

阪急岡本駅 — 岡本(梅林)公園 — 岡本南(桜守)公園 — 本山街園(バラ園) — 『細雪』の碑 — JR住吉駅 — 阿弥陀寺(谷崎潤一郎の歌碑) — 本住吉神社のムクノキ — 住吉川沿いのクロマツ — 倚松庵 — 雀の松原のクロマツ — 阪神魚崎駅

— <岡本コース(1時間)> —

阪急岡本駅 — 本山街園(バラ園) — 岡本南(桜守)公園 — 岡本(梅林)公園 — 鷺の森のケヤキ — 阪急岡本駅

🌸 : 新神戸花の名所50選
🌳 : 市民の木
🌲 : 市民の森
📖 : 文学関連

岡本(梅林)公園



岡本公園高台からの様子



・太宰府飛梅(品種:雲井)



皇后梅(キサイノメ)



八重紅枝垂れ(ヤエベニシダレ)



通知辺(ミチシルベ)

この公園はかつての岡本梅林をしのんで保久良山の梅林が整備されたのに続き、昭和57年に整備され、「梅林公園」の愛称で親しまれています。この公園は六甲山麓の高台にあり、梅の花越しに市街地が一望できます。園内には、福岡県太宰府天満宮から贈られた菅原道真ゆかりの「飛梅」をはじめ、長期間にわたり梅の花を楽しんでもらえるように1月中旬に花を咲かせるミチシルベから運来したシダレウメまで、紅梅・白梅27品種をそろえ、シーズンには多くの市民が観梅に訪れます。

名神高速道路建設により、向日町町会が数百年の桜と水に消えゆくことを覚悟した弥吉が竹部に会いに行くの証。く川治も遠征を歩きながら、以下略。>については実際の笹部郎は阪急岡本駅の北のほとんど線路沿りに、川治の道とは相違します。小説のとおりなら、梅林で有名な「岡本公園」へ行ってしまえば、駅からすぐ裏にしまうのでは、情報もないのでそうなのでしょう。

深田池公園

小説『櫻守』には登場しませんが、岡本公園や岡本南公園とともに『新・神戸花の名所50選』に選ばれている桜の名所です。阪急御影駅北東すぐのところにあります。

市街地に残るため池を保存し、整備された公園で4月になると池を囲むように植えられた桜が水面に映え、多くの花見客が訪れます。また、東側の堤には池にかかる枝ぶりの良い老松が多くあります。



神戸市ではありませんが
自然公園「桜の園」

弥吉が妻・園と新婚生活を送った武田尾の演習林「亦楽(えきらく)山荘」は現在、兵庫県宝塚市に自然公園「桜の園」としてオープンし、市民ボランティアグループによって手入れが行われております。

手軽なハイキングコースとして、行業シーズンには多くのハイカーでにぎわう人気スポットになっていますので、足をのばしてみたいいかがでしょうか?

所在地: 兵庫県宝塚市切畑字長尾山地内
(JR福知山線「武田尾駅」より徒歩約15分)
お問合せ/宝塚市観光案内所 TEL: 0797-81-5344

武田尾の研究家は「隔水亭」と呼ばれ、池の側にあったらしいのですが、水上勉も記録しているように演習林の深さはそんなに水量が多い方ではなかったようです。しかし、水上勉はこの沢の情景を小説の中で絶筆にまで高めています。例を上げれば、「水しぶきをあげる滝の両側は、桜と楓が植えてあるので、ぬれた岩面に木もれ陽が降りかかると、春も秋も、息を呑むような絶景だ。」等です。水上勉は「花守の記」桜の章で『櫻守』の取材の時だと思いが、笹部新太郎の言葉を記しています。「私の夢は、この谷奥に、桜守を建立することだ……」と氏は笑っておられた。「と、そういう意味で作家にとって、ここは絶景であったとしたかったのかもしれない。」

「隔水亭」(「桜の園」園内)

神内が『櫻守』の紹介文です。
< >内は『櫻守』(新潮文庫収録)より原文の引用です。
敢筆をしながら、弥吉や竹部を思い浮かべ、作品の風情を味わってみよう。